



Title	巻頭の辞
Author(s)	矢田, 俊隆
Citation	北大法学論集, 16(2-3), 1-2
Issue Date	1965-12
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/27833">http://hdl.handle.net/2115/27833</a>
Type	bulletin (editorial)
File Information	16(2_3)_P1-2.pdf



[Instructions for use](#)

## 巻頭の辞

昭和三十九年十二月二十四日は、われわれの敬愛する同僚神谷昭教授が突如としてこの世を去られた、忘れがたい日である。まもなく同教授の一周忌を迎えようとするとき、われわれは、心をこめた追悼のしるしとして、ここに本誌を同教授の霊前に捧げたいと思う。

故神谷昭君は、昭和二十八年東京大学法学部第一類を卒業されたのち、東京大学大学院社会科学研究科に進まれ、田中二郎教授の指導のもとに行政法の研究に従事し、昭和三十年三月修士課程を、引続き昭和三十三年三月には博士課程を修了され、同年九月十五日東京大学より法学博士の学位を授与された。その間同年五月十六日には北海道大学法学部助教授に任ぜられて、行政法の講義を担当し、また、大学院法学研究科の授業をも担当され、学生の教育・指導に全力を傾けられた。さらに本学部の行政的運営の面でも、同君はその豊かな学識とすぐれた才能を生かして、大きな役割をはたしてこられた。他方、昭和三十六年十月二十一日以降は、北海道収用委員会委員を依頼されて、本道の地方行政の上でも数々の貢献をなしてこられた。これらの功績は、ながくわれわれの記憶に残るものである。

神谷君の学問的業績については、詳しくは巻末の別稿に譲るが、同君が専攻のフランス行政法・地方自治法などの分野で、学位論文をはじめ数多くの貴重な研究成果を発表して、すでに学界に確固たる地位を築きあげておられたことは、周知の事実であり、また、公法関係の学会における神谷君のめざましい活躍ぶりも、知友の間のなつかしい語り草となっている。こうして同僚・学界から深い信頼と敬愛をうけながら、同君は昭和三十九年五月法学部教授に昇進され、その後の研究・教育活動に多大の期待がよせられていたのである。

旧臘二十四日、この年最後の教授会が開かれとき、教授は元気な姿で出席して活潑に発言され、終了後また元気に退室された。その時われわれの誰が、同君のその夜の急逝を予期しえたであろうか。教授の突然の逝去は、わが法学部のみならず、わが国法学界にとってもまことに甚大な損失であり、同じ学部の中で同君と親しく生活を共にしてきたわれわれにとって、はかりしれぬ悲しみであった。われわれは、教授の大きな功績をあらためて回想するとともに、心から感謝の意を表したいと思う。

教授のフランス行政法にかんする諸論文は、一冊の書物にまとめられて、「北大法学部叢書」の第一巻として近く有斐閣から出版されるはこびになっているが、それとならんで、われわれ同僚がそれぞれ衷悼の誠意をこめて綴った論文を収録して、いまここに故神谷教授の靈前に捧げることができるのは、われわれにとってせめてもの慰めである。いま一度教授のありし日を偲びつつ、つつしんで御冥福を祈るとともに、御遺族の御多幸を祈念してやまぬ次第である。

昭和四十年十二月

北海道大学法学部長

矢 田 俊 隆